宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

ブルゴーニュ公国における宮廷儀礼のクロノロジー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2013-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堀, 博司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4606

宮崎大学教育文化学部紀要　社会科学　第29号（2013）91-110頁

ブルゴーニュ公国における宮廷儀礼のクロノロジー

中堀博司

La chronologie des rituels de la cour de Bourgogne

Hiroshi NAKAHORI

1．はじめに

本稿の目的は、四代のヴァロワ家ブルゴーニュ公、即ち、初代フィリップ・ル・アルディ（豪胆公、公在位1363-1404年、フランドル伯ほか在位1384-1404年）、第２代ジャン・サン・プール（無畏公、在位1404-1419年）、第３代フィリップ・ル・ボン（善良公、在位1419-1467年）および第４代シャルル・ル・テメレール（突進公、在位1467-1477年）が、およそ百年に及んで繰り広げた宮廷儀礼のクロノロジーを一覧化し、今後のブルゴーニュ宮廷史研究に資するための見取り図を作成することにある。

ブルゴーニュ公国およびその宮廷の歴史に関しては、同公国の支配がかつて及んだか、あるいは、対外的な関係を有したヨーロッパ諸国の研究者を糾合しつつ、数多くの研究が蓄積されてきた[1)]。筆者もブルゴーニュ宮廷史の動向を、その基礎に立ち返って歴代公の公位継承（とりわけディジョン入市）、結婚（四代公あわせて８回）、葬儀（ディジョン西郊カルトジオ会シャンモル修道院での葬送）等をめぐって、多少なりとも情報収集と考察を進めてきた[2)]。これらの宮廷儀礼が個別に検討すべき課題であることは言うまでもないが、（先代）公が亡くなれば新公の即位があり、また、即位に先立つか先立たないかはともかく結婚すれば嫡子誕生が待望されるものであり、こうした君侯の通過儀礼は、実際、相互の連関が常に想定されてきたのである。そこで本稿では、ブルゴーニュ公国四代百年にわたる「国家儀礼」とも呼びうる同宮廷の儀礼（クロノロジー）を全体として呈示して、今後の展望を図りたい。

ヴァロワ家ブルゴーニュ公国は、フランス筆頭諸侯たるブルゴーニュ公が、1384年から1477年までの間、神聖ローマ帝国（ドイツ）とフランス王国に跨って領有した諸領邦から構成され、代を重ねるにつれてその領土を拡張していった[3)]。これらの諸領邦は、根拠地であるブルゴーニュ公領を中心とする南部の領域ブロック（ブルゴーニュ地方）と、経済的先進地域であるフランドル伯領を中心とする北部の領域ブロック（低地地方）の南北それぞれに領域的まとまりをなした。公国の政治的・行政的中心都市として、公国前半の初代および第２代の公のもとでは、とりわけディジョン、パリ、リルの各都市が枢要な位置を占めるが、後半の第３代と最後

の公の治世に至っては、第２代公ジャンの殺害（1419年）を契機に両公とも専ら北部の低地地方に長く滞在することになる。ブラバント公領のブリュッセルが次第に首都的な様相を呈してくるとはいえ、概して公たちはフランドル諸都市とブリュッセルの間で宮廷を移動させつつ、北部領域ブロックに足場を固めていったのである。

公国前半期と後半期の間には大きくこのような変化がみられるとはいえ、南部のブルゴーニュ公領の領有こそが、フランス筆頭諸侯たるブルゴーニュ公の地位を保障し、なおかつその首都ディジョンの郊外には、初代公が創建し埋葬されたシャンモルのカルトジオ会修道院が存在した。さらに、第３代公フィリップは、三度目のポルトガル王女イザベルとの結婚（1430年１月）の際に金羊毛騎士団（Ordre de la Toison d'or）を創設し、その本拠をディジョンのブルゴーニュ公邸に附設されるサント・シャペル（「聖礼拝堂」）と定めた。その結果、旧都ディジョンは公国の紛れもない精神的・理念的首都となり、即位ならびにシャンモルでの葬送とも相俟って、ディジョンでの入市は重要な意義を維持し続けたのである[4)]。

他方、初代公フィリップは、妻マルグリット・ド・フランドルを通じてフランドル伯領ほかの低地地方を領有すると、1386年にそのワロン語（フランス語）圏都市リルに評議院および会計院を設置した（ディジョンにも同様に設置）。これによって都市リルは北部領域ブロック全体の行政中心地として浮上する。同市のブルゴーニュ公邸（フランドル伯邸）そばに、初代公妃マルグリットの父フランドル伯ルイ・ド・マルやマルグリット自身も埋葬されたサン・ピエール参事会教会があったことも見逃せない。このような行政的首都リルの重要性はその後も揺るぎないとはいえ、ヘントとともにフランドル有数のフラマン語（オランダ語）圏都市であるブルッヘには同地方で最も由緒ある教会の一つであるシント・ドナース（サン・ドナシアン）教会が存在した。フランドル諸都市が外来のブルゴーニュ公に対し屢々叛乱を惹き起こしたことを考慮すると、同公のブルッヘでの即位後最初の入市は極めて重要で、シント・ドナース教会のブルゴーニュ公（フランドル伯）の宮廷との結びつきもかなり強かった。また、ブルッヘで亡くなった第３代公フィリップの葬儀は、その遺言にもかかわらず、一旦は同市のこの教会で厳かに執り行われたのである[5)]。そのため、本稿ではシント・ドナース教会を有するブルッヘでの入市を項目として掲げている。ディジョンやブルッヘでの入市に際して、新公は都市共同体と宣誓を交わし、旧来の諸慣習・諸特権の確認を必ず行ったのである。

こうして、表「歴代ブルゴーニュ公の宮廷儀礼」（本稿末尾参照）には、以下の項目を年毎（縦軸）に挙げている。即ち、(a)出生、(b)結婚、(c)死没、(d)葬儀、(e)ディジョン入市（サント・シャペル宣誓）、(f)ブルッヘ入市、(g)金羊毛騎士団総会（開催）の各項目である。本稿では、このうち(b)結婚と(d)葬儀を中心に説明を加えていきたい[6)]。

２．歴代公の結婚

まず、四代の各ブルゴーニュ公およびマリ・ド・ブルゴーニュの主に(b)結婚について、以下、生没年・地を除いて、即位（ブルゴーニュ公位継承）および嫡子誕生とともに年代順に列挙する。

Ⅰ　初代フィリップ・ル・アルディ Philippe le Hardi

生没年・地　1342.1.17生（ポントワーズPontoise）～1404.4.27没（ハルHal / Halle）

ブルゴーニュ公位継承　1363年

結婚　A. 1369.6.19火　於ヘントGent / Gand、（旧）シント・バーフ（サン・バヴォン）教会St-Baafskerk / Eglise de St-Bavon[7)]

∞　マルグリット・ド・フランドルMarguerite de Flandre
1350年生（マーレMale）～1405.3.21没（アラスArras）[8)]
父　フランドル伯ルイ・ド・マルLouis de Male（1384.1.30没）
母　マルグリット・ド・ブラバンMarguerite de Brabant（1368年没）

嫡子誕生　1371.5.28（ジャン・サン・プール）[9)]

フランドル伯位等継承　1384年

Ⅱ　第２代ジャン・サン・プールJean sans Peur

生没年・地　1371.5.28生（ディジョンDijon）～1419.9.10没（モントロMontereau）

結婚　B. 1385.4.12水　於カンブレCambrai、ノートル・ダム司教座聖堂Cathédrale N.-Dame[10)]

∞　マルグリット・ド・バヴィエールMarguerite de Bavière
1363年生（デン・ハーフDen Haag）～1424.1.24没（ディジョン）
父　バイエルン公アルブレヒトAlbrecht von Bayern / Albert de Bavière（1404年没）
母　マルガレーテ・フォン・リークニッツ=ブリークMargarete von Liegnitz-Brieg / Marguerite de Brieg（1386年没）[11)]

嫡子誕生　1396.7.31（フィリップ・ル・ボン）[12)]

ブルゴーニュ公位継承　1404年

フランドル伯位等継承　1405年

Ⅲ　第３代フィリップ・ル・ボンPhilippe le Bon

生没年・地　1396.7.31生（ディジョン）～1467.6.15没（ブルッヘBrugge / Bruges）

初婚　C. 1405.2.14土　於パリParis[13)]

∞　①ミシェル・ド・フランスMichelle de France
1395.1.11/12生～1422.7.8没（ヘント）
父　フランス王シャルル6世Charles VI（1422年没）
母　イザボ・ド・バヴィエールIsabeau de Bavière（1435年没）

ブルゴーニュ公位継承　1419年

再婚　D. 1424.11.30木　於ムラン=アンジルベールMoulins-Engilbert、ヌヴェール伯城館[14)]

∞　②ボンヌ・ダルトワBonne d’Artois
1394.6初生～1425.9.17没（ディジョン）[15)]
父　ユ伯フィリップ・ダルトワPhilippe d’Artois（1397年没）
母　マリ・ド・ベリMarie de Berry（1434年没）

再々婚　E. 1430.1.7土　於スロイスSluis / L’Ecluse[16)]

∞　③イザベル・ド・ポルチュガルIsabelle de Portugal
1397年生（エヴォラÉvora）～1471.12.17没（エールAire）
父　ポルトガル王ジョアン1世Joãn I（1433年没）
母　フィリッパ・オブ・ランカスタPhilippa of Lancaster/ Philippa de Lancastre

（1415年没）[17]

嫡子誕生　1433.11.11（シャルル・ル・テメレール）[18]

Ⅳ　第４代シャルル・ル・テメレールCharles le Téméraire

生没年・地　1433.11.11生（ディジョン）～1477.1.5没（ナンシィ郊外devant Nancy）

［アラス会議　1435.8.5～9.21］

初婚　F. 1439.6.11木　於サン=トメールSt-Omer、（恐らく）サン・ベルタン修道院Abbaye de St-Bertin[19]

∞　①カトリーヌ・ド・フランスCatherine de France

1428年生～1446.7.30-31没（ブリュッセルBruxelles）

父　フランス王シャルル７世Charles VII（1461年没）

母　マリ・ダンジューMarie d'Anjou（1463年没）

［雉の誓いの宴　1454.2.17（於リルLille、ド・ラ・サル館Hôtel de la Salle）］

再婚　G. 1454.10.30水　於リル

∞　②イザベル・ド・ブルボンIsabelle de Bourbon

1436年生～1465.9.25-26 没（アントウェルペンAntwerpen / Anvers）[20]

父　ブルボン公シャルルCharles de Bourbon（1456年没）

母　アニェス・ド・ブルゴーニュAgnès de Bourgogne（1476年没）

嫡子誕生　1457.2.13（マリ・ド・ブルゴーニュ）[21]

ブルゴーニュ公位継承　1467年

再々婚　H. 1468.7.3日　於ダムDamme[22]

∞　③マルグリット・ド・ヨークMarguerite de York / Margaret of York

1446年生～1503.11.23没（メヘレンMechelen / Malines）

父　ヨーク公リチャードRichard, duke of York（1460年没）

母　シスリ・ネヴィルCicely Neville / Cécile Neville（1495年没）

Ⅴ　マリ・ド・ブルゴーニュMarie de Bourgogne

生没年・地　1457.2.13生（ブリュッセル）～1482.3.27没（ブルッヘ）

フランドル伯位等継承　1477年

結婚　I. 1477.8.19火　於ヘント

∞　マクシミリアン１世Maximilian I. / Maximilien Ier[23]

1459.3.22生（ヴィーナー・ノイシュタットWiener Neustadt）～1519.1.12没（ヴェルスWels）

父　神聖ローマ皇帝フリードリヒ３世Friedrich III.（1493年没）

母　エレオノーレ・フォン・ポルトゥガルEleonore von Portugal（1467年没）

嫡子誕生　1478.6.22（フィリップ・ル・ボ）

以下では、四代公の結婚と嫡子誕生の時間的関係についてのみ言及しておきたい。

初代公フィリップは、1369年６月19日にヘントのシント・バーフ教会で挙式し、２年後の1371年５月28日に嫡子である第２代公ジャンをもうけた。この嫡子ジャンは、1385年４月12日

にカンブレ司教座聖堂で、妹マルグリットとともにドイツ・バイエルン家との合同挙式を執り行った。さらにその嫡子となる第３代公フィリップが生まれたのは11年後の1396年７月31日であり、奇しくものちに公位を継承するヌヴェール伯ジャンのニコポリス十字軍遠征中であった。嫡男フィリップの誕生までにはやや時間がかかっているが、フィリップには姉が二人がおり、長姉マルグリットは初婚（1412年）の相手フランス王太子ギュイエンヌ公ルイ（フランス王シャルル７世の兄）に先立たれた後には、のちにブルターニュ公となるアルチュールと再婚（1423年）した。一方、フィリップの次姉マリはブルゴーニュ公家とその後も緊密な関係を維持し続けた下ライン地方に拠点をもつクレーヴェ公家に嫁いでいる（1406年）[24]。

次に、嫡子に恵まれず、なおかつともに二度も公妃に先立たれた第３代公フィリップと第４代公シャルルについて述べておこう。第３代公フィリップは、初婚で1405年２月14日（於パリ）に幼くしてフランス王女ミシェル・ド・フランスを娶ったが、同妃は実家のフランス王家と嫁ぎ先のブルゴーニュ公家の血生臭い確執の中で1422年７月８日に没した。２年後、公フィリップは、自身の叔父でアザンクールの対イングランド戦において没したヌヴェール伯フィリップの寡婦ボンヌ・ダルトワと再婚した。しかし、翌1425年９月にまたもや公妃に先立たれた。その後、三度目のポルトガル王女イザベルとの結婚は、1430年１月７日、スロイスで執り行われた。しかし、三度目の結婚においても、二人の男子を産みながらも続けざまに失い、ようやく嫡子シャルルが誕生したのは３年後の1433年11月11日で、ディジョンにおいてであった。

最後の公シャルルは、その父フィリップ同様に、幼くしてフランス王女カトリーヌと1439年６月11日（於サン・トメール）に結婚するが、７年後に先立たれた。その後1454年10月30日にリルにおいて、ブルボン公女（父フィリップの妹アニェスの娘で、シャルルの従妹）イザベル・ド・ブルボンと再婚した。このイザベルとの間に生まれたのが、唯一の嫡出子となるマリ・ド・ブルゴーニュであり、ブリュッセルで1457年２月13日に誕生した。しかし、イザベルは1465年９月下旬に亡くなり、シャルルは公位継承（1467年）後の1468年７月３日に、イングランド王家の血筋を引くマーガレットと再々婚することになる。1477年に、ナンシィの野で公シャルルが戦没したことによってブルゴーニュ公国は解体するが、遺娘マリ・ド・ブルゴーニュの、マクシミリアンとの結婚（於ヘント、1477年８月19日）を通じて、ブルゴーニュ公国の遺産は曲がりなりにもハプスブルク家へと引き継がれていくのである。

3. 歴代公の葬儀

Ⅰ　初代フィリップ・ル・アルディ（於ハル、1404.4.27没。享年62歳）[25]

1404.4.27　ブリュッセル近郊のハルにおいて逝去。臓腑はハルのシント・マルティヌス教会に、年代記作者モンストルレに拠れば、心臓はパリ北郊サン・ドニ修道院に埋葬された。遺体はその後ディジョン郊外墓所シャンモル修道院に移送された。

――.6.16　シャンモルでの葬送。

――.6.17　第２代公ジャン・サン・プールのディジョン入市。

※　初代公妃（フランドル女伯）マルグリット（於アラス、1405.3.21没）[26]

1405.3.21　アラスにて没。

――.3.25　父伯ルイ・ド・マルおよび母マルグリット・ド・ブラバンが埋葬されたリルのサン・ピエール参事会教会にて葬送。

――.4.12　フランドル伯として第２代公ジャンによるリル入市。

Ⅱ　第２代ジャン・サン・プール（於モントロ、1419.9.10没。享年48歳）[27]

1419.9.10　パリ南東モントロで王太子シャルル（のちのフランス王シャルル７世）による謀殺。モントロのノートル・ダム教会での遺体保管。

1420.6.23　第３代公フィリップ・ル・ボンによるモントロの奪還。

――.6.25　イングランド王ヘンリ５世らとともにミサ挙行後、シャンモル移送。

――.7.12　シャンモルでの葬送（1420.7.11到着）。

1422.2.19　第３代公フィリップによるディジョン入市。

Ⅲ　フィリップ・ル・ボン（於ブルッヘ、1467.6.15没。享年70歳）[28]

1467.6.15　ブルッヘにて没。その後、検死。

――.6.21　イングランド王ヘンリ６世らとともにシント・ドナース参事会教会にて葬送（臓腑の埋葬）。遺体はシャンモル移送までの安置。

1474.1.23　第４代公シャルル・ル・テメレールのディジョン入市。

――.2.11　シャンモルでの葬送（1474.2.10到着、サント・シャペルを経由）。

Ⅳ　シャルル・ル・テメレール（於ナンシィ郊外devant Nancy、1477.1.5没。享年43歳）[29]

1477.1.5　ナンシィ目前の戦場にて討死。ナンシィのサン･ジョルジュ参事会教会に埋葬（遺体は聖セバスティアン祭壇の近く、心臓は聖母マリアの小礼拝堂内に安置）。

1550　遺体は、曽孫カール５世によりブルッヘのオンゼ・リーヴェ・ブラウ（ノートル・ダム）教会に移送。

1743　心臓は、ナンシィ・聖ジョルジュ参事会教会の取り壊しのため、ナンシィのフランシスコ会修道院に移送。

初代公は1404年４月27日にブリュッセル南西近郊のハルで没し、その腐蝕する臓腑はハルのシント・マルティヌス教会に、心臓は年代記作者モンストルレに拠ればサン・ドニ修道院に埋葬されたという。防腐処理された遺体の方は、150以上の喪服が支給された上で４月30日にハルを立ち、約550 kmの道程をディジョンに向けられた。当初、遺体は３人の息子ジャン、フィリップ、アントワーヌに伴われたが、嫡子ジャンは途中フランス王への臣従礼のため一旦葬送行列を離れ、ディジョンの目前サン=セーヌ=ラベイで再度合流した。遺体はドゥエに１週間程留められ、アラス、パリ、カンブレジ、シャンパーニュを経由して移送された。６月15日に嫡子ジャンが合流した後、６月16日にシャンモル修道院で葬儀が執り行われ、翌６月17日には、新公ジャンのディジョン入市が行われた[30]。

ところで、初代公妃であるフランドル女伯マルグリットは、公フィリップが没した翌年の1405年３月21日にアラスで亡くなった。マルグリットは､自身の父母が眠るリルのサン･ピエール参事会教会に３月25日に埋葬され、嫡子ブルゴーニュ公ジャンが正式にフランドル伯となった。なお、初代公夫妻の夫婦仲が悪かった訳ではなく、ブルゴーニュ公国支配領域における南北二極性を示しているとする見解もみられる[31]。

次に第２代公ジャンは、1419年９月10日にパリ南東のモントロで王太子シャルル（のちのフ

ランス王シャルル７世）によって謀殺された。モントロは引き続き王太子派の勢力下に置かれたが、この間、幸いにしてこの地の聖職者がジャンの遺骸を保管していた。翌年1420年６月23日に、ブルゴーニュ公フィリップがモントロを奪還し、６月25日にはイングランド王ヘンリ５世らとともに同地でミサが挙行された。その後、遺体は川を遡って移送され、７月12日にシャンモル修道院に埋葬された。この謀殺事件による混乱の結果、第３代公フィリップが新公として正式にディジョン入市を果たしたのは、さらに翌々年の1422年２月19日のこととなる[32)]。

第３代公フィリップは、1467年６月15日にブルッヘにおいて没した。検死後、６月21日にイングランド王ヘンリ６世らとともにブルッヘのシント・ドナース参事会教会において、かなり厳かな葬儀が催された。ブルゴーニュ公の臓腑はそこに埋葬され、遺体もシャンモルへの移送まで同教会に安置された。というのも、第４代ブルゴーニュ公シャルルは依然としてフランス王ルイ11世とは微妙な関係にあって、その対応のため、すぐには南部の支配領域には向かえなかったからである。結局、６年半余りの後、1474年１月23日に新公シャルルのディジョン入市が果たされ、その後２月11日に、先代公および公妃の遺体はサント・シャペルを経てシャンモル修道院に埋葬された。

最後に第４代公シャルルについては、同公はロレーヌ公領ナンシィの野に果てたが、敵のロレーヌ公がナンシィでの大勝利の証しである敵将シャルルの遺体を執拗に手離さなかったため、その遺体は、70年余り後になって、シャルルの曾孫にあたるハプスブルク家のカール５世の手でようやくブルッヘのオンゼ・リーヴェ・ブラウ教会に葬られることになったのである。なお、1743年にナンシィのサン・ジョルジュ参事会教会は取り壊しとなったため、シャルルの心臓は、同市のフランシスコ会修道院へと移されたという[33)]。

４．おわりに

これまで、ブルゴーニュ四代公たちの宮廷儀礼を年代的に整理し、結婚と葬儀についてのみやや詳しく述べてきた。以上の通り、結婚と嫡子誕生、そして葬儀と公位継承（とりわけディジョン入市）が、それぞれ時間的連続にあることは明白であるが、ブルゴーニュ公国は南北二つの領域ブロックに分断されたため、諸儀礼の間に時間的空白が生まれたのもまた自明である。

初代から第３代の諸公がディジョン入市を果たすまでは、まだ公国の重心がそれほど北にシフトしていなかったことからすれば、最後の公シャルルの場合のみが出生（1433年）においても、即位（1467年）と先代公葬儀（1474年）においても若干特異であったと言える。出生時には、金羊毛騎士団が南部の都市では唯一初めて、なおかつその本拠地ディジョンで執り行われ、赤子シャルルも特別に騎士叙任されて騎士団員となった。他方、その父公フィリップと母イザベルが亡くなった時に、新公シャルルはすぐにはディジョンに戻れなかった。それ故に、最後の公の亡き父母の遺言を執行するためのシャンモルでの葬送と根拠地ブルゴーニュ公領を領有する儀礼であるディジョン入市とをあわせて盛大に行わなくてはならなかったのである。

本稿では、四代ブルゴーニュ公が執り行った最低限度の宮廷儀礼、即ち冠婚葬祭ならぬ「即婚葬祭」（正確には、出生をも含めて）を一覧化したに過ぎないが、馬上槍試合（トーナメント）や即位後初回に止まらない入市式等、数多くの祝祭や各種イベントが催されている。こうした宮廷や都市にかかわる祝祭が、ここで取り上げた宮廷儀礼の中にどのように織り込まれていくかを理解することも重要な課題である。

参考文献一覧

(1) Archives départementales de la Côte-d'Or (Dijon) = ADCO, G 1125 (1228-1651) : Dijon. Chapitre de la Sainte-Chapelle. Serments des ducs, duchesses de Bourgogne, des rois de France et confirmations des privilèges. Liasse, 44 pièces, parchemin ; 7 pièces, papier.

(2) ARMSTRONG, C. A. J., *England, France and Burgundy in the Fifteenth Century*, London, Hambledon Press, 1983 (*History Series*, 16).

(3) AUTRAND, Fr., *Jean de Berry. L'art et le pouvoir*, Paris, Fayard, 2000.

(4) BLOCKMANS, W., *Emperor Charles V, 1500-1558*, transl. by I. VAN DEN HOVEN-VARDON, London, Arnold ; New York, Oxford UP, 2002.

(5) BLOCKMANS, W. / PREVENIER, W., *The Promised Lands. The Low Countries under Burgundian Rule, 1369-1530*, transl. by E. FACKELMAN ; ed. by E. PETERS, Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1999.

(6) BONENFANT, P., *Philippe le Bon. Sa politique, son action*, études présentées par A. M. BONENFANT-FEYTMANS, Bruxelles, De Boeck, 1996.

(7) CALMETTE, J., *Les grands ducs de Bourgogne*, Paris, A. Michel, 1949 (rééd., 1997). （ジョゼフ・カルメット『ブルゴーニュ公国の大公たち』田辺保訳、国書刊行会、2000年。）

(8) CARON, M.-Th. / CLAUZEL, D. (éd.), *Le Banquet du Faisan. 1454 : l'Occident face au défi de l'Empire ottoman*, Arras, Artois PU, 1997.

(9) CAUCHIES, J.-M. (dir.), *A la cour de Bourgogne. Le duc, son entourage, son train*, Turnhout, Brepols, 1998 (*Burgundica*, I).

(10) CHABEUF, H., Charles le Téméraire à Dijon en janvier 1474, relations officielles, avec introduction, *Mémoires de la Société bourguignonne de géographie et d'histoire,* t. 18, 1902, p. 79-349.

(11) CHAUNU, P. / ESCAMILLA, M., *Charles Quint*, Fayard, 2000.

(12) DE GRUBEN, Fr., *Les chapitres de la Toison d'or à l'époque bourguignonne (1430-1477)* , Leuven, Leuven UP, 1997 (*Mediaevalia Lovaniensia*, ser. 1, studia 23).

(13) DE SMEDT, R. (dir.), *Les chevaliers de l'Ordre de la Toison d'Or au XVe siècle. Notices bio-bibliographiques*, 2e éd., Frankfurt am Main etc., 2000 (Kieler Werkstücke. Reihe D : *Beiträge zur europäischen Geschichte des späten Mittelalters*, 3).

(14) DUBOIS, H., *Charles le Téméraire*, Paris, Fayard, 2004.

(15) FROISSART (Jean), *Chroniques*, éd. S. Luce et al., Paris, Société de l'Histoire de France, 1869-1975, 15 vol.

(16) GAUDE-FERRAGU, M., *D'or et de cendres. La mort et les funérailles des princes dans le royaume de France au bas Moyen Age*, Villeneuve d'Ascq, PU du Septentrion, 2005 (*Histoire et civilisations*, 9).

(17) LA MARCHE (Olivier de), *Mémoires*, éd. par H. BEAUNE, J. D'ARBAUMONT, Paris, Renouard, 1883-1888, 4 vol.

(18) LECUPPRE-DESJARDIN, E., *La ville des cérémonies. Essai sur la communication politique dans les anciens Pays-Bas bourguignons*, Brepols, Turnhout, 2004 (*Studies in European Urban History, 1100-1800*, 4).

(19) LE FEVRE DE SAINT-REMY (Jean), *Chronique*, éd. par Fr. MORAND, Paris, Renouard, 1876-1881, 2 vol.

(20) LORY, E.-L., *Les obsèques de Philippe-le-Bon, duc de Bourgogne, mort à Bruges en 1467*, Extrait des *Mémoires de la Commission des Antiquités de la Côte-d'Or*, Dijon, 1869.

(21) MIROT, L., *Jean sans Peur de 1398 à 1405 d'après les comptes de sa chambre aux deniers*, Paris, 1939 (Extrait de l'*Annuaire-Bulletin de la Société de l'histoire de France*, 1938, p. 129-245).

(22) MONSTRELET (Enguerran de), *Chronique, 1400-1444*, éd. par L. DOUËT-D'ARCQ, Paris, Renouard, 1857-1862, 6 vol.

(23) MOREAU, E. de, *Histoire de l'Eglise en Belgique*, t. IV, *L'Eglise aux Pays-Bas sous les ducs de Bourgogne et Charles-quint, 1378-1559*, Bruxelles, L'Edition universelle, 1949.

(24) MURRAY, J. M., The Liturgy of the Count's Advent in Bruges, from Galbert to Van Eyck, in HANAWALT, B. A. / REYERSON, K. L. (ed.), *City and Spectacle in Medieval Europe*, Minneapolis ; London, Univ. of Minnesota Press, 1994 (*Medieval Studies at Minnesota*, 6), p. 137-152.

(25) PETIT, E., *Itinéraires de Philippe le Hardi et de Jean sans Peur, ducs de Bourgogne (1363-1419) , d'après les comptes de dépenses de leur hôtel*, Paris, 1888 (*Coll. de documents inédits sur l'histoire de France*).

(26) PLANCHER, Dom U. / MERLE, Dom Z., *Histoire générale et particulière de Bourgogne*, Dijon, 1739-1781 (2e éd., Paris, 1974), 4 vol.

(27) PROST, B. / PROST, H., *Inventaires mobiliers et extraits des comptes des ducs de Bourgogne de la maison de Valois (1363-1477)* , Paris, E. Leroux, 1908-1913, 2 vol.

(28) *Publication du Centre européen d'études bourguignonnes (XIVe-XVIe s.)* [=*PCEEB*], no 34, 1994 : « Fêtes et cérémonies aux XIVe-XVIe siècles ».

(29) RÉGNIER-BOHLER, D. (dir.), *Splendeurs de la cour de Bourgogne. Récits et chroniques*, Paris, R. Laffont, 1995.

(30) SCHNERB, B., *L'Etat bourguignon, 1363-1477*, Paris, Perrin, 1999.

(31) SCHNERB, B., *Jean sans Peur. Le prince meurtrier*, Paris, Payot, 2005.

(32) SOMMÉ, M., La jeunesse de Charles le Téméraire d'après les comptes de la cour de Bourgogne, *Revue du Nord*, t. LXIV, 1982, p. 731-750.

(33) SOMMÉ, M., Le testament d'Isabelle de Portugal et la dévotion moderne, *PCEEB*, no 29, 1989, p. 27-45.

(34) SOMMÉ, M., Le cérémonial de la naissance et de la mort de l'enfant princier à la cour de Bourgogne au XVe siècle, *PCEEB*, no 34, 1994, p. 87-103 (repris dans CAUCHIES, *A la cour*, p. 33-48).

(35) SOMMÉ, M., *Isabelle de Portugal, duchesse de Bourgogne. Une femme au pouvoir au XVe siècle*, Villeneuve d'Ascq, PU du Septentrion, 1998.

(36) VANDER LINDEN, H., *Itinéraires de Marie de Bourgogne et de Maximilien d'Autriche (1477-1482)* , Bruxelles, M. Lamertin, 1934.

(37) VANDER LINDEN, H., *Itinéraires de Charles, duc de Bourgogne, Marguerite d'York et Marie de Bourgogne (1467-1477)* , Bruxelles, M. Lamertin, 1936.

(38) VANDER LINDEN, H., *Itinéraires de Philippe le Bon, duc de Bourgogne (1419-1467) et de Charles, comte de Charolais (1433-1467)* , Bruxelles, Palais des Académies, 1940.

(39) VAUGHAN, R., *Philip the Bold. The Formation of the Burgundian State*, London, Longman, 1962 (new ed., Woodbridge, Boydell, 2002).

(40) WEIGHTMAN, Ch., *Margaret of York, Duchess of Burgundy, 1446-1503*, Gloucester, A. Sutton ; New York, St. Martin's Press, 1989.

(41) 青谷秀紀『記憶のなかのベルギー中世――歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成――』京都大学学術出版会、2011年。

(42) 河原温「15世紀フランドルにおける都市とブルゴーニュ公権力――フィリップ善良公のブルッヘ「入市式」（1440年）を中心に――」、渡辺節夫編『ヨーロッパ中世の権力編成と展開』東京大学出版会、2003年、361-386頁。

(43) 河原温『ブリュージュ――フランドルの輝ける宝石――』中央公論新社、2006年。

(44) 河原温「15世紀ブルゴーニュ公国における地域統合とフランドル都市――ブルゴーニュ公とブルッヘの儀礼的関係を中心に――」、渡辺節夫編『ヨーロッパ中世社会における統合と調整』創文社、2011年、243-261頁。

(45) 金七紀男『エンリケ航海王子――大航海時代の先駆者とその時代――』刀水書房、2004年。

(46) 中堀博司「ブルゴーニュ公国における宮廷と首都――都市ディジョンの位相――」、服部良久編『中・近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションと紛争・秩序（科学研究費補助金基盤研究（A）成果報告書Ⅰ）』京都大学大学院文学研究科、2011年、55-61頁。
(47) 中堀博司「ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの第二遺言書（1441年）――前編――」『宮崎大学教育文化学部紀要（社会科学）』26・27、2012年、21-38頁。
(48) 中堀博司「ヴァロワ家ブルゴーニュ公の公位継承と公妃の宣誓（1）――ディジョン入市式次第――」『宮崎大学教育文化学部紀要（社会科学）』26・27、2012年、39-50頁。
(49) 中堀博司「ヴァロワ家ブルゴーニュ公の公位継承と公妃の宣誓（2）――ディジョン都市特権確認文書――」『宮崎大学教育文化学部紀要（社会科学）』28、2013年、31-50頁。
(50) 中堀博司「クレーヴェとポルトガル――ブルゴーニュ公家の婚姻政策に関する覚書――」『宮崎大学教育文化学部紀要（社会科学）』28、2013年、1-29頁。
(51) 畑奈保美「ブルゴーニュ国家――十四～十五世紀ヨーロッパにおける「統合」の試み――」、渡辺昭一編『ヨーロピアン・グローバリゼーションの歴史的位相――「自己」と「他者」の関係史――』勉誠出版、2013年、64-74頁。
(52) 堀越孝一『ブルゴーニュ家――中世の秋の歴史――』講談社、1996年。

註

1) 差し当たり、中堀「クレーヴェ」1-3頁を参照のこと。
2) 中堀「公位継承（1）」、中堀「公位継承（2）」、中堀「クレーヴェ」、中堀「宮廷と首都」、中堀「第二遺言書（前編）」。
3) 公国の全体的枠組みについての邦語文献として、差し当たり次の 2 点を挙げておく。堀越『ブルゴーニュ家』、畑「ブルゴーニュ国家」。
4) 中堀「公位継承（2）」33-38頁、中堀「宮廷と首都」。
5) 青谷『記憶』197 頁、河原「地域統合とフランドル都市」257-259頁。MOREAU, *Histoire*, t. IV, p. 70-71 ; MURRAY, The Liturgy.
6) なお、本来であれば、出生にかかわる儀礼は洗礼であるが、現段階では体系的に調査できていないため、洗礼の起点となる誕生（日）に代えて示した。後述の「嫡子誕生」にかかる註も参照のこと。SOMMÉ, Le cérémonial. また、ブルゴーニュ宮廷における儀礼全般にかかわる論集として、次の 2 点のみ挙げておく。*PCEEB*, no 34 ; CAUCHIES, *A la cour*.
7) PETIT, *Itinéraires*, p. 56, 459 ; SCHNERB, *L'Etat*, p. 62 ; SCHNERB, *Jean*, p. 21 ; BLOCKMANS / PREVENIER, *The Promised*, p. 13. FROISSART, t. VII, p. 130 : « [...] *Tantost apries ceste ordenance, on proceda ou mariage qui se fist et confrema en le bonne ville de* ***Gand****. Et la eut grans festes et grans solennites, au jour des noces, devant et apries, et grant fuison de signeurs, barons et chevaliers.* [...] » ; PLANCHER, t. III, p. 30, 560-563 n. VI-VII. なお、現在の同教会は、旧シント・ヤン修道院である。以下、クロノロジーについては、表の典拠註記も参照のこと。また、年代記等の引用史料上におけるアクサン等の発音記号は、敢えて外した箇所がある。
8) マルグリットの初婚（1357年）の相手は、カペ家最後のブルゴーニュ公フィリップ・ド・ルーヴル Philippe de Rouvres（1346～1361年）である。SCHNERB, *L'Etat*, p. 16.
9) PETIT, *Itinéraires*, p. 69, 485 ; SCHNERB, *Jean*, p. 23-25. 嫡子ジャンの洗礼は、翌月 6 月 5 日（キリストの聖体の祝日）にディジョンのサント・シャペルにおいて、アヴィニョン教皇グレゴリウス11世が特別に派遣した南仏カルパントラCarpentras司教ジャン・フランドランJean Flandrinによって執り行われた。代父の一人は教皇自身であり、リヨン大司教シャルル・ダランソンCharles d'Alençonがその代理

を務めた。もう一人の代父は、父である初代公フィリップの親しい兄ベリ公ジャンであり、嫡子ジャンの父方の伯父に当たる。ジャンの名は、洗礼者聖ヨハネに由来するこの伯父の名から与えられた。代母は母方の曽祖母に当たるアルトワ女伯マルグリット・ド・フランスである。

10) PETIT, *Itinéraires*, p. 176, 517-518 ; VAUGHAN, *Philip the Bold,* p. 88 ; BLOCKMANS / PREVENIER, *The Promised,* p. 29 ; SCHNERB, *Jean*, p. 46-49 ; ARMSTRONG, *England*, p. 307. FROISSART, t. XI, p. 191 : « [...] *Quant ces coses furent sceues et trouvees en voir, on ne detria gaires puisedi, mais furent li mariage juré et aconvenenchiet de Guillaume de Hainnau avoir a femme Marguerite de Bourgongne, et de* ***Jehan de Bourgongne*** *avoir* ***Marguerite de Hainnau*** *; et devoient retourner a* ***Cambrai*** *toutes ces parties, pour faire le solempnité des espousailles,* ***as octaves de Pasques l'an de grace mille trois cens quatre vins et chiunc****.* [...] » ; PLANCHER, t. III, p. lxxxiv-lxxxv pr. LXXXXV ; PROST, *Inventaires*, t. II, nos. 1151-1177, 1206, 1215 ; p. 187, n. 4.

11) バイエルン公アルブレヒトは、エノー・ホラント・ゼラント摂政、のち伯。さらにその父(公妃マルグリットの祖父)は皇帝ルートヴィヒ 4 世(デア・バイエル)。上掲註10参照。

12) PETIT, *Itinéraires*, p. 553. 嫡子フィリップの洗礼は、翌月 8 月 7 日にシャロン司教、トロワ司教、シトー修道院長らの立ち会いのもとで執り行われた。

13) SCHNERB, *Jean*, p. 142 ; MIROT, *Jean*, p. 90-91 (218-219) ; ARMSTRONG, *England*, p. 239. MONSTRELET, t. I, p. 96 : « [...] *Et assez tost apres furent promeuz, de la partie du duc de Bourgongne et a sa requeste, les mariages de Loys, duc d'Acquitaine, daulphin, filz ainsné du roy de France, et de la fille ainsnee du duc de Bourgongne, nommee Marguerite, et aussi de* ***Phelippe, conte de Charrolois****, seul filz et heritier d'icellui duc, et de* ***Michele, fille au roy dessusdit****.* [...] ». 1403年5月5日にフランス王シャルル 6 世と亡きブルゴーニュ公フィリップとの間で合意された。

14) ARMSTRONG, *England*, p. 244 ; VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe*, p. 43 ; AUTRAND, *Jean*, p. 276-278 ; 中堀「第二遺言書(前編)」35-36頁註 3。

15) ボンヌの初婚(1413年)の相手は第 3 代公フィリップの叔父(第 2 代公ジャンの末弟)ヌヴェール伯フィリップ(1415年没)。また、ボンヌの祖父はベリ公ジャン(1416年没)で、母マリ(1434年没)の再々婚(1400年)の相手はブルボン公ジャン(1434年没)。上掲註14参照。

16) VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe*, p. 82 ; SOMMÉ, *Isabelle*, p. 35 ; RÉGNIER-BOHLER, *Splendeurs*, p. 1037-1043. LE FEVRE DE SAINT-REMY, t. II, p. 158-159 : « *Apres icelle belle feste acomplie et la response faicte aux ambassadeurs du duc, le roy Jehan de Portingal fut content du mariage, et envoya sa dicte fille, dame* ***Ysabel****, grandement et honnourablement, a compaignie de l'infandon Ferand, frere de ladicte dame, le conte d'Orin et pluiseurs aultres grans seigneurs, dames et damoiselles, devers* ***le duc****. Laquelle dame, arriva au port de* ***Lescluse en Flandres****, en décembre mil iiij^{c}xxix, ou elle fut bien et honnourablement receue ; et la elle fut environ viij jours, pour elle et ses gens ung peu refaire de la maladie de la mer ; car ilz eulrent tourment merveilleux, et tant que pluiseurs des navires laisserent l'un l'autre, dont les ungs ariverent en Angleterre, les aultres en Bretaingne. Mais, par la grace de Dieu, tout retourna a Lescluse. Apres que ladicte dame eult sejourné a Lescluze, elle entra a* ***Bruges le viij^{e} jour du mois de janvier, l'an mil iiij^{c} xxix****.* [...] ».

17) イザベルの父ジョアン 1 世はアヴィス騎士団長で、1385年にアヴィス朝を創始した。一方、母フィリッパはランカスタ公ジョン・オブ・ゴーントJohn of Gauntとブランシュ・オブ・ランカスタBlanche of Lancasterの娘にあたる。ランカスタ公の父はイングランド王エドワード 3 世(1377年没)であり、母方はイングランド王家の血筋を引いている。詳細については、金七『エンリケ航海王子』を参照。

18) DUBOIS, *Charles*, p. 25. 嫡子シャルルの洗礼は、誕生日即日に執り行われた。代父の一人は、父である第 3 代公フィリップの従兄弟に当たる若きヌヴェール伯シャルルである。シャルルの名は、シャルルマーニュに由来するこのヌヴェール伯の名から与えられた。もう一人の代父は、公フィリップの忠臣である、侍従にして評議官たるクロイCroy領主アントワーヌである。代母は母イザベルの侍女のロ

シュフォールRochefort夫人ジャンヌ・ド・ラ・トレモイユJeanne de la Trémoilleであった。

19) シャルル 7 世が、1438年 9 月30日、ブロワBloisにおいて署名し、第 3 代公フィリップとイザベルは、1438年11月12日、ブリュッセルにおいて同意した。VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe*, p. 189 ; SOMMÉ, *Isabelle*, p. 56, 71 ; DUBOIS, *Charles*, p. 30-31（但し、デュボワが「サン・トメール」を「カンブレ」としたのは誤り）; SOMMÉ, La jeunesse, p. 745. MONSTRELET, t. V, p. 401-402 : « [...] *Et partant de Cambray alerent par aulcuns jours en la ville de Saint-Omer, ou ledit duc de Bourgongne estoit et tenoit son estat. Lequel, grandement acompaignié de chevaliers et escuyers, yssi hors d'ycelle ville et vint aux champs. Et lui venu au devant de ladicte dame* ***Katherine de France****, le conjoy et festoia moult reveramment, et l'y fist grand honneur et joieuse recepcion, et tous ceulx qui estoient avec lui. Et les mena dedens ladicte ville de* ***Saint-Omer****, ou le mariage fut parconfermé. Si y furent faites tres grandes et melodieuses festes et esbatemens par pluiseurs journées, tant en joustes comme aultrement, tous aux despens du duc de Bourgongne. Et estoient lors l'entrepreneur d'ycelles joustes, pour la partie d'ycelui duc, le seigneur de Crequi, contre les aultres deffendans. Si demourerent les dessusdis seigneurs asses longuement au dessusdit lieu de Saint-Omer, pour estre a ung parlement qui se devoit faire d'entre les deux rois de France et d'Angleterre entre Gravelignes et Calais. Duquel asses tost je feray mencion* ».

20) 母アニェスは、夫となる第 4 代公シャルルの父第 3 代公フィリップの末妹。遺娘マリは、1477年にハプスブルク家のマクシミリアンと結婚する。DUBOIS, *Charles*, p. 52, 55-56. 1454.3.23金にリルにおいて最初の合意署名がなされた。

21) DUBOIS, *Charles*, p. 75-76. 嫡子マリの洗礼は、同月 2 月17日にブリュッセルのブルゴーニュ公（ブラバント公）邸（クーデンベルク宮）の礼拝堂で、公フィリップの半兄弟であるカンブレ司教ジャン・ド・ブルゴーニュによって執り行われた。代父は、当時父シャルル 7 世との不和でブルゴーニュ宮廷に滞留していた王太子ルイ（のちのルイ11世）である。一方、代父の王太子と対等な適任者がいなかったため、代母は置かれず、マリの祖母である公妃イザベルがその代役をした。

22) DUBOIS, *Charles*, p. 137-138, 165-166, 182-184, 189-196 ; RÉGNIER-BOHLER, *Splendeurs*, p. 1068-1090. マルグリット（マーガレット）の兄は、イングランド王エドワード 4 世（1483年没）。LA MARCHE, t. III, p. 105 : « [...] *Le lendemain, qui fust* ***troiziesme jour de juillet****, mondit seigneur* ***le duc de Bourgoingne et de Brabant*** *se partit, a privee compaignie, entre quatre et cinq heures du matin, et se tira au lieu du* ***Dan****, ou il trouva madicte dame* ***Marguerite*** *et sa compaignie, preparee et advisee de le recepvoir, comme il estoit ordonné ; et la mondit seigneur l'espousa, comme il appertenoit, par la main de l'evesque de Salsbery dessusdit, et, apres la messe chantee, mondit seigneur s'en retourna en son hostel a Bruges ; et croys que, tandis que les aultres serimonies se firent, il feit provision de dormir, comme s'il eust a faire aucung guet ou escoute pour la nuyt advenir* [...] ».

23) DE SMEDT, *Les Chevaliers*, p. 185 ; DUBOIS, *Charles*, p. 438 ; VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie*, p. 18, 120-125.

24) 中堀「クレーヴェ」。

25) PETIT, *Itinéraires*, p. 338, 342, 574-580 ; SCHNERB, *L'Etat*, p. 136-140 ; SCHNERB, *Jean*, p. 132-139 ; MONSTRELET, t. I, p. 87-90.

26) SCHNERB, *Jean*, p. 142-143, 148 ; MONSTRELET, t. I, p. 95-97.

27) PETIT, *Itinéraires*, p. 451 ; SCHNERB, *L'Etat*, p. 170 ; SCHNERB, *Jean*, p. 680, 693, 695.

28) VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe*, p. 508 ; VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles*, p. 3 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers*, p. 1, 59 ; DUBOIS, *Charles*, p. 140, 142, 326, 329-330 ; LORY, *Les obsèques* ; CHABEUF, Charles ; RÉGNIER-BOHLER, *Splendeurs*, p. 902-906.

29) VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles*, p. 78 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers*, p. 77 ; DUBOIS, *Charles*, p. 438 ; GAUDE-FERRAGU, *D'or et de cendres*, p. 320-321 ; RÉGNIER-BOHLER, *Splendeurs*, p. 953-1025.

30) SCHNERB, *L'Etat*, p. 136-140.
31) GAUDE-FERRAGU, *D'or et de cendres*, p. 73.
32) SCHNERB, *Jean*, p. 691-695.
33) GAUDE-FERRAGU, *D'or et de cendres*, p. 320-321.

［付記］本稿は、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。

表　歴代ブルゴーニュ公の宮廷儀礼

※[1] PLH : Philippe le Hardi　[2] JSP : Jean san Peur　[3] PLB : Philippe le Bon　[4] CLT : Charles le Téméraire

年	(a) 出生	(b) 結婚	(c) 死没	(d) 葬儀	(e) ディジョン入市（サント・シャペル宣誓）	(f) ブルッヘ入市	(g) 金羊毛騎士団総会
1342	[1] PLH, *Pontoise* , 1.17						
1363							
1364					[1] PLH, 11.26		
1365							
1366			∞ Marguerite de Flandre				
1367							
1368							
1369		[1] PLH, *Gent* , 6.19					
1370					[1] Marguerite de F.,9.12		
1371	[2] JSP, *Dijon* , 5.28						
1372							
1373							
1374							
1375							
1376							
1377							
1378							
1379							
1380							
1381			∞ Marguerite de de Bavière				
1382							
1383							
1384			[0] Louis de Male, *St-Omer* , 1.30	[0] Louis de Male, *Lille* , 2.27		[1] PLH, 4.26	
1385		[2] JSP, *Cambrai* , 4.12					
1386							
1387							
1388							
1389							

年	(a) 出生	(b) 結婚	(c) 死没	(d) 葬儀	(e) ディジョン入市（サント・シャペル宣誓）	(f) ブルッヘ入市	(g) 金羊毛騎士団総会
1390							
1391							
1392							
1393							
1394							
1395							
1396	[3] PLB, *Dijon* , 7.31						
1397							
1398							
1399							
1400							
1401			∞ Michelle de France				
1402							
1403							
1404			[1] PLH, *Hal* , 4.27	[1] PLH, *Champmol* , 6.16	[2] JSP, 6.17		
1405		[3] PLB, ①*Paris* , 2.14	[1] Marguerite de F., *Arras* , 3.21	[1] Marguerite de F., *Lille* , 3.25		[2] JSP, 4.30	
1406							
1407							
1408							
1409					[2] Marguerite de B., 5.12		
1410							
1411							
1412							
1413							
1414							
1415							
1416							
1417							
1418							
1419			[2] JSP, *Montereau* , 9.10			[3] PLB, 9.22	

年	(a) 出生	(b) 結婚	(c) 死没	(d) 葬儀	(e) ディジョン入市（サント・シャペル宣誓）	(f) ブルッヘ入市	(g) 金羊毛騎士団総会
1420			∞ Bonne d'Artois	[2] JSP, *Champmol* , 7.12			
1421							
1422			[3] Michelle de F., *Gent* , 7.8	[3] Michelle de F., *Gent* , 7.12	[3] PLB, 2.19		
1423							
1424		[3] PLB, ②*Moulins-Engilbert* , 11.30	[2] Marguerite de B., 1.24		[3] Bonne d'A., 12.14		
1425			[3] Bonne d'A., 9.17				
1426							
1427			∞ Isabelle de Portugal				
1428							
1429							
1430		[3] PLB, ③*Sluis* , 1.7					*0. Brugge* , 1.10
1431							*1. Lille* , 12.4
1432							*2. Brugge* , 12.2
1433	[4] CLT, *Dijon* , 11.11				[3] Isabelle de P., 7.21		*3. Dijon* , 11.29
1434							
1435							*5. Bruxelles* , 11.30
1436			∞ Catherine de France				
1437							
1438							
1439		[4] CLT, ①*St-Omer* , 6.11					
1440						([3] PLB, 12.11)	*6. St-Omer* , 11.30-12.1
1441							
1442							
1443							
1444							
1445							*7. Gent* , 12.12
1446			[4] Catherine de F., *Bruxelles* , 7.30-31				
1447							
1448							
1449							

年	(a) 出生	(b) 結婚	(c) 死没	(d) 葬儀	(e) ディジョン入市 (サント・シャペル宣誓)	(f) ブルッヘ入市	(g) 金羊毛 騎士団総会
1450							
1451			∞ Isabelle de Bourbon				*8. Mons* , 5.4
1452							
1453							
1454		[4] CLT, ②*Lille* , 10.30					*Faisan, *Lille* , 2.17
1455							
1456							*9. Den Haag* , 5.8
1457	[5] Marie de B., *Bruxelles* , 2.13						
1458							
1459							
1460							
1461							*10. St-Omer* , 5.6
1462			∞ Marguerite d'York				
1463							
1464							
1465			[4] Isabelle de B., *Antwerpen* , 9.25-26	[4] Isabelle de B., *Antwerpen* , 10.2			
1466							
1467			[3] PLB, *Brugge* , 6.15	([3] PLB, *Brugge* , 6.21)			
1468		[4] CLT, ③*Damme* , 7.3				[4] CLT, 4.9	*11. Brugge* , 5.14
1469							
1470							
1471			[3] Isabelle de P., *Aire* , 12.17	[3] Isabelle de P., *St-Omer* , 12.30			
1472							
1473							*12. Valenciennes* , 5.8-9
1474			∞ Maximilien Ier	[3] PLB, *Champmol* , 2.11	[4] CLT, 1.23		
1475							
1476							
1477		[5] Marie de B., *Gent* , 8.19	[4] CLT, *devant Nancy* , 1.5				
1478	[6] Philippe le Beau, *Brugge* , 6.22						*13. Brugge* , 4.30-5.1
1479							

年	(a) 出生	(b) 結婚	(c) 死没	(d) 葬儀	(e) ディジョン入市（サント・シャペル宣誓）	(f) ブルッヘ入市	(g) 金羊毛騎士団総会
1480							
1481							*14. 's-Hertogenbosch* , 5.9
1482			[5] Marie de B., *Brugge* , 3.27				
1491			∞ Jeanne de Castille				*15. Mechelen* , 5.26
1496		[6] Philippe le B., *Lierre* , 10.20					
1500	[7] Charles Quint, *Gent* , 2.24-25						
1501							
1502							
1503			[4] Marguerite d'Y., *Mechelen* , 11.23				
1504							
1505							
1506			[6] Philippe le B., *Burgos* , 9.25				

※角括弧[　] は初代ブルゴーニュ公フィリップから数えて何代目かを示す。公妃も同様。
※斜体、下線は地名を指す。
※金羊毛騎士団総会は1500年までの記載。
※人名は原則としてフランス語表記に統一した。
※以下、各宮廷儀礼年月日の典拠を略記で挙げる。本文末尾の文献一覧を参照のこと。

典拠註記

1342.1.17 : VAUGHAN, *Philip the Bold* , p. 1 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 48（『大公たち』55頁）。
1364.11.26 : PETIT, *Itinéraires* , p. 15, 459 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 45 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 49（『大公たち』55頁）; 中堀「公位継承（２）」32頁。
1369.6.19 : PETIT, *Itinéraires* , p. 56 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 62 ; SCHNERB, *Jean* , p. 21 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 53-54（『大公たち』63頁）。
1370.9.12 : ADCO, G 1125.
1371.5.28 : PETIT, *Itinéraires* , p. 69, 485 ; SCHNERB, *Jean* , p. 23 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 104（『大公たち』116頁）。
1384.1.30 : SCHNERB, *L'Etat* , p. 74 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 72-73（『大公たち』81-82頁）。
1384.2.27 : SCHNERB, *L'Etat* , p. 75-78.
1384.4.26 : PETIT, *Itinéraires* , p. 166 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 79 ; LECUPPRE-DESJARDIN, *La ville* , p. 138-139 ; 河原『ブリュージュ』127頁。
1385.4.12 : PETIT, *Itinéraires* , p. 176, 517-518 ; VAUGHAN, *Philip the Bold* , p. 88 ; SCHNERB, *Jean* , p. 46-49.
1396.7.31 : PETIT, *Itinéraires* , p. 553 ; BONENFANT, *Philippe* , p. 21 ; SCHNERB, *Jean* , p. 100 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 178（『大公たち』197頁）; 中堀「第二遺言書（前編）」21頁。

1404.4.27 : PETIT, *Itinéraires* , p. 338, 574-580 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 136-138 ; SCHNERB, *Jean* , p. 132 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 87（『大公たち』98頁）。
1404.6.16 : PETIT, *Itinéraires* , p. 342, 574-580 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 138-140 ; SCHNERB, *Jean* , p. 133-138.
1404.6.17 : PETIT, *Itinéraires* , p. 342 ; SCHNERB, *L'Etat* , p.140 ; SCHNERB, *Jean* , p. 138-139.
1405.2.14 : SCHNERB, *Jean* , p. 142.
1405.3.21 : PETIT, *Itinéraires* , p. 346 ; SCHNERB, *Jean* , p. 142-143.
1405.3.25 : PETIT, *Itinéraires* , p. 346 ; SCHNERB, *Jean* , p. 142-143.
1405.4.30 : PETIT, *Itinéraires* , p. 347 ; SCHNERB, *Jean* , p. 148.
1409.5.12 : ADCO, G 1125.
1419.9.10 : PETIT, *Itinéraires* , p. 451 ; SCHNERB, *L'Etat* , p. 170 ; SCHNERB, *Jean* , p. 680 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 171（『大公たち』189頁）。
1419.9.22 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 1 ; BONENFANT, *Philippe* , p. 168 ; 河原『ブリュージュ』127頁。
1420.7.12 : SCHNERB, *Jean* , p. 695 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 184（『大公たち』203頁）。
1422.2.19 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 22 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 187（『大公たち』205-206頁）；中堀「公位継承（２）」32、41-43頁。
1422.7.8 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 25 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 187, 231（『大公たち』207、257頁）；中堀「第二遺言書（前編）」35-36頁註3。
1422.7.12 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 25.
1424.1.24 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 36 ; 中堀「第二遺言書（前編）」35-36頁註3。
1424.11.30 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 43 ; 中堀「第二遺言書（前編）」35-36頁註3。
1424.12.14 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 43 ; ADCO, G 1125.
1425.9.17 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 50 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 231（『大公たち』257頁）；中堀「第二遺言書（前編）」35-36頁註3。
1430.1.7 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 82 ; SOMMÉ, *Isabelle* , p. 35 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 1 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 201（『大公たち』223頁）。; 中堀「第二遺言書（前編）」21頁。
1430.1.10 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 82 ; SOMMÉ, *Isabelle* , p. 35 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 3 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 3 ; 中堀「第二遺言書（前編）」36頁註4。
1431.12.4 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 96 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 107 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 57.
※なお、第1回（1431年）から第7回（1445年）までの金羊毛騎士団総会は、同騎士団の守護聖人たる聖アンドレの祝日（11月30日）に開催することが定められていたが、1446年にそれは5月2日開催に変更された。従って、総会開催の日付は、第7回までは11月30日に、第8回以降は5月2日に前後する日付となる。ここでは差し当たり、デ・スメト編『15世紀における金羊毛騎士団の騎士たち』に付された新団員選出の日付を記しておく。
1432.12.2 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 105 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 143 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 63.
1433.7.21 : ADCO, G 1125.
1433.11.11 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 113 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 77 ; DUBOIS, *Charles* , p. 23 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 231（『大公たち』257頁）。
1433.11.29 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 114 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 165 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 68 ; DUBOIS, *Charles* , p. 25.
1435.11.30 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 147 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 189.
1439.6.11 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 189 ; SOMMÉ, *Isabelle* , p. 56, 71 ; DUBOIS, *Charles* , p. 30-31.
1440.11.30-12.1 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 200 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 215 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 86, 88.
1440.12.11 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 201 ; 河原『ブリュージュ』126-133頁 ; 河原「都市とブルゴーニュ公権力」。
1445.12.12 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 238 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 229 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 95.
1446.7.30-31 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 242.
1451.5.4 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 280 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 249 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 109.
1454.2.17 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 324 ; DUBOIS, *Charles* , p. 50 ; CARON / CLAUZEL, *Le Banquet* , p. 9 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 299（『大公たち』341頁）。
1454.10.30 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 334 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 77 ; DUBOIS, *Charles* , p. 55.

1456.5.8 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 356 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 271 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 125.
1457.2.13 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 367 ; DUBOIS, *Charles* , p. 75 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 248（『大公たち』278頁）。
1461.5.6 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 427 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 289 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 137.
1465.9.25-26 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 486-487 ; DUBOIS, *Charles* , p. 127.
1465.10.2 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 487 ; DUBOIS, *Charles* , p. 127.
1467.6.15 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Philippe* , p. 508 ; VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 3 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 1 ; DUBOIS, *Charles* , p. 140.
1467.6.21 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 3 ; DUBOIS, *Charles* , p. 142.
1468.4.9 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 7 ; 河原『ブリュージュ』127頁。
1468.5.14 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 8 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 315 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 153 ; DUBOIS, *Charles* , p. 185.
1468.7.3 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 9 ; DUBOIS, *Charles* , p. 190 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 239（『大公たち』268頁）。
1471.12.17 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 36-37 ; SOMMÉ, M., *Le testament d'Isabelle* , p. 27 ; DUBOIS, *Charles* , p. 268.
1471.12.30 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 36-37 ; DUBOIS, *Charles* , p. 269.
1473.5.8-9 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 51 ; DE GRUBEN, *Les chapitres* , p. 361 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 164, 171.
1474.1.23 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 59 ; DUBOIS, *Charles* , p. 326 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 255（『大公たち』286頁）。
1474.2.11 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 59 ; DUBOIS, *Charles* , p. 329-330.
1477.1.5 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Charles* , p. 78 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 77 ; DUBOIS, *Charles* , p. 438 ; CALMETTE, *Les grands ducs* , p. 380（『大公たち』425頁）。
1477.8.19 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie* , p. 18, 120-125 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 185.
1478.4.30-5.1 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie* , p. 33 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 185, 191.
1478.6.22 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie* , p. 37 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 204.
1481.5.9 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie* , p. 100 ; DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 204.
1482.3.27 : VANDER LINDEN, *Itinéraires de Marie* , p. 117.
1491.5.26 : DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 225.
1496.10.20 : DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 204-205.
1500.2.24-25 : CHAUNU / ESCAMILLA, *Charles* , p. 9 ; BLOCKMANS, *Emperor* , p. ix.
1503.11.23 : WEIGHTMAN, *Margaret* , p. 214.
1506.9.25 : DE SMEDT, *Les Chevaliers* , p. 205.